

「はだしのゲン」 講談師が訪れたインド

神田 香織

今年の2月26日から3月6日まで、熊本県天草のNP
O法人「インドに幼稚園を作る会」に同行し初めてインド
に行ってきました。この会の活動についてはすでに本誌で
紹介されていますので、ご存じの方も多いと思います。

理事長の大久保美喜子さんは天草の方。5年前に天草に
移住した私の講談教室のアマチュア弟子だった笠井洋子さ
んのご縁です。毎年のように何度も天草に公演で呼んでも
らっているうちに大久保さんと知り合い、一度もインドへ
行ったことがない私はこのツアーに「インドに幼稚園を作
る会」の会員となって参加した次第。しかし、まもなく2
年目の3・11が目前に迫っている中でこのツアー、福島県
いわき市出身で「原爆」「原発」をテーマにした「はだし
のゲン」や「チェルノブイリの祈り」などの講談を長年語
ってきた私、各地から講演の依頼も入ってきており、中
にはインド行きと重なりお断りする場合も。「なんで今イン

ドなんですか」と驚かれたりしましたが、思い切つて参
加して本当によかったとしみじみ思っております。

ちなみに私は3・11の直後、継続して福島を支援すべ
く、関東に住むいわき出身者に声をかけ「NPOふくしま
支援・人と文化ネットワーク」を立ち上げました。低線量
被曝を受けながらの生活を余儀なくされている福島の子供
たちの保養事業に力を入れています。一時空気のきれいな
ところで過ごす細胞がリフレッシュします。天草へは今
夏、福島の子供たち9人が9日間受け入れてもらうことにな
りました。市長さんも全面的に協力してくれ、うれしい
限り。子供たちは大久保さんが経営する民宿へも宿泊予定
です。

さて、講談とはなんでしょう。講談とは日本三大大衆話
芸のひとつで、他に落語、浪曲があります。落語は笑いを

提供し、浪曲は涙を誘い、そして講談は笑いあり涙あり、
何より庶民の怒りを代弁する話芸といわれていて力強い発
声法が特徴です。小道具として張り扇と釈台（机）があり、
張り扇で釈台を叩き、パバンという音を響かせて調子よく語
ります。また、講談は落語、浪曲と比較して歴史が古く、

奈良、平安の昔にその原型が見られます。ただし、一般に
よく知られる講談の始まりは「太平記読み」とされていて、
食に困った浪人が老若男女を集めて「太平記」を面白おか
しく読んでかかせたというものです。これが講談のルーツ
といったところでしょうか。今現在、関東、関西合わせて
100人にも満たない講談界。なぜこの世界に入ったか？
高校時代演劇が好きだった私は卒業後新劇の劇団の俳優
養成所に入ったものの東北弁が抜けずに苦勞の連続でした。
発声やイントネーションの矯正に役立つからと先代の2代
目神田山陽に講談を習い始めたところ面白くなり、俳優よ
りやりがいがありそうだと言ったところ面白くなり、俳優よ
りのが今から30年前のことです。

では、なぜ「はだしのゲン」を語るようになったか。3
年前の前座修行を終え、いよいよ一人前の講談師としてス

タートすることになったとき、解放感もあり思い切つてサ
イパンに遊びに行き、そこで第2次世界大戦の爪跡の数々
に出会ったのです。この旅行が「はだしのゲン」を取り上
げるきっかけとなったのでした。

二度と戦争の悲劇を繰り返さないために私ができること
は講談で語ることに意気込み、日本に戻り、沖縄、広島、
長崎と戦跡を取材して歩きました。まだ20代だった私に
とつて戦争の現実はいま以上に悲惨でした。一般人を虫けら
のように殺戮し、アジア各地では2000万とも言われる
人々を殺め、反省どころかアジア諸国に心からお詫びもせ
ずに経済大国となった日本。次第に気分が落ち込み自分に
はテーマが重すぎる、無理だと諦めかけたときに、広島
の原爆資料館の売店で「はだしのゲン」単行本全10巻を見
つけたのです。早速購入、一気に読みました。そこから伝
わってきたのは、戦争と原爆の悲劇はもろんですが、子
どもの持つパワー、力強さ！そして「怒り」だったので
す。「これだ！」とひらめき、早速、許可を得ようと当時

埼玉県新座市に住んでいた中沢啓治さん宅を訪ね快諾を得、
「講談はだしのゲン」は1986年の8月に国立演芸場で

初演を迎えたのでした。

実は昨年20012年の8月6日、中沢さんと久しぶりに対面しました。広島「平和の夕べ」に出演した際、主催者が中沢さんを招待してくれたのです。

「はだしのゲン」を語ってきて故郷福島が原発事故でやられてしまい、悔しいです。二度と事故が起きないように、はだしのゲンやチェルノブイリの講談をこれからも語っていきます」という私に、車いすの中沢さんはマスク越しに「身体に気をつけてがんばってね」と何度も頷きながら激励してくれました。その時の中沢さんの目は、あの漫画のいたずらっこ中岡ゲンそのものでした。昨年一番嬉しい思い出が中沢さんとの対面、そして一番悲しい出来事は12月の中沢さんの訃報でした…。

「チェルノブイリの祈り」は2002年の暮れが初演です。もう11年も語っております。仲間からはお金にもならない演目を語る変な人と言われ、世間からは「社会派講師」とレッテルを張られ、ま、「社会派講師」と言われるのは決して悪い気はしません、特に社会派にこだわったわけではなく、「はだしのゲン」を語っているう

ちに、理不尽な目に遭いながらも必死に人間らしく生きようとする弱者側に立った講談をテーマに語りたいと思うようになったのです。

そうです。原爆と原発の恐怖を語ってきたのに、私のふるさとが原発事故に見舞われてしまったのです。しかも人災で。これほど悔しい思いをしたことはありませんでした。そして今、福島東電第一原発事故から2年以上が経ちましたが、悔しさ、怒りは増すばかりです。政府、電力会社による補償も賠償もほとんど進展していません。また15万人もの人々が県内外で避難民としての生活を余儀なくされたままです。自主避難者には1円の援助もありません。人権を無視されたような環境で絶望感に苛まれながら日々かろうじて生きている多くの県民の皆さん。二度と原発事故は起こしてほしくないと誰もが願っているのに、政府は原発を海外に売り込むため躍起となつていて、電力会社は再稼働をもくろんでいる。また年間20ミリシーベルトまで大丈夫などと汚染地区に住民を戻そうともしているのです。まだ事故の収束もしていないのに、毎時1000万ベクレルの放射能が出たままなのに、です。そんなこんな

で悶々としているとき、私はインドへと飛び立ったのでした。

インドは新鮮な驚きに満ちていました。ここからは私のブログを引用します。

2月26日、現地時間19時15分着。着陸時、見降ろす景色は巨大なスラム街、ここがあの映画「スラムダンクミリオネア」の舞台かと思わず息をのむ。タクシーでホテルへ向かうことに。理事の長野さんが一緒なので心強い。そこから車でバイクがクラクションを鳴らしながら割り込み運転、ボコボコ車と高級車が押し合いへし合いといった風情。

27日、先に来ていた会長の大久保さん、会員の岡部さん、山崎さんと合流しホテルを出てムンバイ空港へ。そして空路アウランガバードへ。空港で、バラテさんたちの出迎え。バラテさんは4年間熊本本の崇城大学に留学して去年インドへ戻られた方で、留学前に当時18歳だったジヨテイさんと結婚。お二人の間には可愛い盛りの一歳半の男の子シユリくんがいる。留学中に長野さんと知り合い、

ご夫妻がモリンガ栽培の農地の手配をしてくれたということです。途中チャイをしながら、ジャムケットのキナラホテルへ向かう。舗装されてないでこぼこ道、牛が横断しているところ、クラクションを鳴らし、いなくなつてまた運転。どこへ行っても、牛、羊、犬、猪豚、猫、犬たちが人間と同じように付き添いなしに歩いているのが、当たり前前の景色だと気がつき、まだ牛や馬が荷車を引いていたかすかな古里の情景を思い出し、瞬間、子どもの頃にワープ。叫びたような開放感が押し寄せてきた。

5時間かかって到着したガンダルバディ村、早速モリンガ農園へ。地中深く井戸を掘る灌漑作業を手伝う。モリンガの種を食べてみる。滋養たっぷりとみえ、3粒食べたら口の中がもわつとして、水を飲むととても甘く、「このミネラルウォーター、甘味入り？」と聞いてしまった。もちろん水は甘くない。ヨガの先生の山崎さん、強すぎと言って座り込み、そのまま瞑想。大きな夕日が大地の向こうに隠れようとしている。静かにゆつくりと時が過ぎていった。

28日、ホテルの窓から牛の姿が見える。デカン高原の朝だ。近くの屋台でチャイしてガンダルバディ村の小学校



ガンダルバディ村の小学校で村をあげての歓迎を受けた神田さん（前列左）。右隣りがヨガの山崎さん。

へ。村をあげての歓迎会、パソコン、文具品贈呈式、長老や先生や村の人たちがスピーチ、歓迎の花束贈呈など、子供たちも目を輝かせていた。村の女性たちが作った昼食をいただく。その後、教室で交流会。大久保さん、キャベツの歌で指あそび、子供たちやおばさんも歌を披露。楽しいひと時。ちなみにインドは女性の先生が多い。農村の女性

は家庭に入って家族のために働く。女の子たちにとって生は憧れの職業なのだ。この小学校は1959年創立。生徒は5歳から10歳まで男26人女22人の48人いる。幼稚園のようなものはあるが、行かない子も多いそうだ。ここが終わると、来る途中にあった7年制の中学校に。義務教育は4年と7年で11年。雨が降らない時期は農作業ができないので親たちは出稼ぎに出かける。家族と暮らしているのは5人。残った子供たちと食事などすべて一緒だそう。面倒見がよく共同体で生活しているのに驚く。子供たちに将来の夢を聞くと、女の子はドクター、先生。男の子はエンジニアだった。また、明日も来るよと車から手を振って子供たちときよならする。

3月4日、ムンバイ・ヒルトップホテルの朝。朝日が前のビルに当たって景色が輝き出す。鳥たちが盛んに飛び回っている。私の部屋の庇にもカラスや鳩が頻繁にやってくる。トンビは静かに輪を描いている。しばらくお目にかかってない鳥たちの朝の活動だ。ここでも子ども時代に戻ってプする。学校からの帰路、トンビの影に「鷺（わし）だ」と逃げ回ったこと。子供の頃はなんでも大きく見えた

ものだ。

この日は実に盛り沢山のスケジュール。日本山妙法寺へ向う。森田上人からお寺の説明を聞いた後、日本人墓地へ。明治時代から多くの天草の女性が唐行きさんとしてインドに渡り、ここで没している、唐行きさん研究家でもある大久保さんが、インドに関心を持ち、このNPOを立ち上げるきっかけの一つでもあった。

その後、お寺へ戻り、お寺の幼稚園の園児たちと交流。お遊戯や歌を披露してくれた。園児たちは近くのスラムの子供たち。無料で面倒見ているそうだ。インドはお金のある人が宗教家に尽くす。宗教家は貧しい人々の支えとなる。宗教家にとってはインドはいい国と森田さん。移動中に森田さんがいろいろ話してくれた。インドで98年に核実験があり、広島長崎の原爆を語り歩いている自分は多くのところで核実験反対を唱えている。大学生たちの間で反戦反核運動が盛り上がった。そして私が「はだしのゲン」をインドで語る機会があれば自分が通訳してあげましょうと言ってくれた。ありがたい。

お寺から1時間ほど車で移動し、お寺の世話人でもある

NGOのモノハさん宅で昼食をご馳走になる。そのモノハさん曰く「スラムはマフィアが支配している。子供たちは危ない道に進むことになる。女の子は売春婦に」。

スラムエリアは大きいのは50ぐらい。5、6年前から建設ラッシュがはじまり1日約1000人が新たに加入している。ムンバイの中心がスラム街。経済発展は格差を広げるだけで富めるものはますます富み、貧しいものはもっと貧しくなっている。57億のビルに家族4人で住み70人のお手伝いを雇って暮らしている金持ちとは新興財閥だ。官民癒着で彼らは政府に守られ、やりたい放題。スラムからタクシーに乗って売春街に通う女の子や未亡人も多い。売春街の病人は9割がたがエイズ。エイズ根絶資金はたくさん来ているが悪いNGOがピンハネしてしまい、患者にはいかない。一割が儲けて後は昔のままだ。

住むところがない女性は夜になるとタクシーやトラックの運転手を引く張る。売春街のカマティプラ。デワダシ（神のしもべ）の女の子たちが年をとるとボンベイに売られる。ヒンドゥーの教えは搾取が建て前。女性を売るシステムができていく。それがデワダシ。歌ったり踊ったりす

る女優の原型で、踊った後、買われる。講談師のような仕事をインドではカタカリンというそうだ。女性の地位の低さに唾然としてしまう。格差もスケールが違う！

一旦ホテルに戻り、長野さん、バラテさん、通訳のチュウタイさんご夫妻と合流して、いよいよ買春街へ向かう。とてもじゃないが堪え難いホコリとクラクション、ゴミの匂いの中、売春の通りを通過する。口紅をつけた女性たちが立っている。中には若い子もいた。またもや映画「スラムダンクミリオネラ」を思い出す。A A W Cの事務所訪問。売春婦たちの子供たちを世話している。まず一階の幼稚園を覗くとちようど昼寝の時間だった。暑いからか、床に直接横になっていた。

もう一か所の幼稚園はスラムの真ん中、いわゆるスポーツの幼稚園。昼は7人、夜は3人のヘルパーで世話している。ここで生活している子は2歳半から16歳までの幼稚園と小中学校の生徒15人とのことだった。たまたまいた子供たちは「ナマステ、ナマステ」と楽しそうにはしゃいでいた。月に1回は親を呼んで会議している。このエリアでこういう子供たちは340人いるとのことだ。この子たち

が一人でも多く学問を身につけて自分の人生を切り開いてほしい。そんな思いで「インドに幼稚園を作る会」は13年も活動を続けているわけだ。

さてさて、このインド旅行は私にとっていい時期だったとしみじみ思う。原発事故から2年目の節目の3月ではある。だが、いつとき、すべてを置いて、灼熱のインドに身を委ねた。私はインドを旅して、幼かった頃はだして野原を駆け回っていた頃の自分を取り戻した、そしてパワーをもらった。すごい数のオートバイ、車、それも廃車同然の。クラクションのうるさいこと。カラス、牛、犬、ヤギ、そして子ども、大人の多いこと。田舎も都会も、地震がきたら間違ひなく崩れるだろう家々。道路の前では物売り、軽食の屋台と。とにかく混沌として、煩雑で、不衛生で、埃の中。そして勢いよく日々生活している。行き倒れた人、路上生活者、うつろな目でスラムをふらついていた女性。喧騒と寺院の静けさ。日本の数倍の貧富の差。言語も宗教も沢山。この国をまとめるなんて不可能に思える。すべてがインドにはある。

(講談師)

インドの村のモスリンを日本に

インド東部、西ベンガル州の村で織られているモスリンやカディイを使って、心と肌にやさしいものづくりをしています。モスリンというと、日本ではウールの着物のことを言いますが、インドでは西ベンガル州からバングラディッシュの辺りで織られる薄い綿織物のことを言います。カディイは手紡ぎ手織り布のことを言いますが、150番手以上の細さの糸で織られたものをベンガル地方ではモスリンと言います。150番手とは1gの綿の量で150mの長さに紡いだものを言います。細い糸を紡ぐには湿度がないと切れやすくなるので、高温多湿のベンガル地方は細い糸を作るのに適していたようです。

モスリンの由来はいろいろあるようですが、ベンガル語で「なめらか」という意味があるそうです。絹のようななめらかさがあり、絹を身に着けないムスリムが絹織物以上に美しく見せるために織ったときいたことがあります。

初めてモスリンの服を着た時に、今までにない肌触り

神倉 雅代

心がホツとした感触が忘れられず、自分でもこんな生地が織りたいと思ひチャルカで糸紡ぎから始めました。初めてチャルカを使ったとき、初めてという気がしないほどしっくりとなつかしい感じがしたのをおぼえています。

20代の頃、駒場東大前にある日本民藝館によく通っていました。そこでは美術品だけではなく、家族や自分のために作られたものも展示されています。美しさや技術はもちろん、じんわりと心にくるものがあり、見ているだけで癒されています。私は布に癒されてきたので布の力を信じています。なので下着を作るならばカディで作りたいと思っただけです。

しかし、カディはともかく、モスリンがインドのどこで織られているのか最初は知りませんでした。ベンガル地方で織られているという事はわかりましたが、ベンガルはどこなのかわからず途方に迷っていました。宿の人に相談したところコルカタにある物産館に行くといいた言われた